「目を転じて、思い悩むな」

西 田 直 樹

毎日コロナ、コロナで騒いでおりますが、季節は着実に春から梅雨・初夏に移っております。芋苗植えの年長児の遠足は無事終了しました。ご理解・協力有難うございました。

さて６月の聖句はルカによる福音書12章27節です。「野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言っておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。」だから何を食べようか、何を着ようかと思い悩むなと主イエスは言われます。

わたしたちの人生が思い悩みだけの連続であったとしたら何と暗い人生でしょうか。しかし、全く思い悩みのない人生など存在しないのではないでしょうか。

思い悩むとは前途を悲観することです。行き詰まり状態で頓挫・挫折することです。しかし問題は何によって何を思い悩むかです。例えば他の人のそれと比較して自分の能力、資質、才能、持ち物を見つめて頭を抱えてしまうのです。なぜ、どうして、わたしだけが？・・・。他人志向で常に他と比較する生活は優越感と劣等感の間を行きつ戻りつする繰り返しなのです。

首をうなだれて自分のお臍だけを見つめていると、「おこもり」の生活になってしまいます。しかし目を転じて空の鳥や野の花に視線を移すと、さらに雄大な山々や海に心を向けると新しい境地に到達するのです。さえずる小鳥が大雨の時どうしているのか。誰も気に掛けてくれないが健気に咲いている雑草の花よ。山や海に向い立つときのわたし。小鳥や雑草や山や海を擬人化して自己憐憫するのではなく、それらを創造された神様を覚え、神様のご配慮によって自然が保たれているその恵みを深く覚えるのです。

神様が小鳥や雑草でさえ守り、支え、生かしてくださっているのだから、ましてこのわたしに神様のみ手が届かないはずがない。天に聳え立つ山々、広い広い海原を創造された神様はこの小さな、取るに足りないわたしがわたしであって良いと言ってくださっているのです。だから「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」（マタイによる福音書6章34節）と言ってくださっているのです。

一つのことにだけに目も心も奪われると全体が見えなくなります。目を転じること、視線を移すこと、そして見えていなかったものを見つめること、神の存在に気づくことです。そこから思い悩まないで良い自分を発見するのです。「あなたはあなたであって良い」と言ってくださっている神さま有難うございます。